

新 刊 紹 介

- 新刊紹介
1. 古代宮都と地方官衙の造営 小笠原好彦著
 2. 大日本古記録 陽明文庫本 勘例 下 東京大学史料編纂所編纂
 3. アレクサンドロス大王の歴史 デイオドロス著 森谷公俊訳注

小笠原好彦著 『古代宮都と地方官衙の造営』

吉川弘文館 二〇二二・一二刊
A5 四〇〇頁 一・一〇〇〇円

著者は、考古学の立場で、古墳時代から奈良・平安時代を対象に、官都や寺院の造営・地方豪族・地方官衙などの研究を進めてきており、この分野の著作も多数ある。本書は二部構成で、第一部に古代宮都の性格や造営に関する論考十一編（うち新稿四編）、第二部に地方官衙に関する論考三編を収める。

第一部は、飛鳥時代の王宮や、難波宮と藤原京・平城京の関係などを扱ったもの。特徴的なのは、複都制を大きな視野でとらえ、難波宮だけでなく恭仁京・紫香楽宮・保良宮なども、分量を割いて基礎的な検討をしている点であろう。

とくに興味深い論点は、飛鳥宮と酒船石遺跡・龜形石像物を検討し、酒船石遺跡を斉明天皇の「兩槻宮」と推定、これを朝鮮式山城と同一構造の王宮と評価する点（一・二章）。聖武朝難波宮に特徴的な内裏

前殿について、それ以前にない形式で、平城宮東方官衙Ⅰ期（奈良時代前半）に類似構造を持つ官庁があること、さらにいくつかの国衙・郡衙遺跡の建物配置に共通性を指摘し、これが奈良時代前半に導入された形式で、叙位等の儀式に列立する官人のためのテント状の建物であったと推定する点などである（三・六章）。

これに続く、紫香楽宮の構造（八章）や、保良宮とその周辺地域の検討（五・九章）および瀬田川河畔を中心とした木材生産と運搬の検討（一〇・一一章）などを主題とする諸論考からは、主に聖武朝における近江地域が様々な視角から明らかにされる。保良宮の擬定地については、従来説で可能性の高いのは石山国分遺跡であるが、氏は、これを保良宮関連の官衙とし、本体となる淳仁天皇・孝謙上皇の御在所は、南方にある田辺台地と推定、さらに恭仁京の内裏を参考とした復元案を示す。

第一部の大きな論旨は明快で、古代の複都制を明らかにする目的から、それぞれの宮都造営の契機・役割、それを物質面で支える地域の構造などについての理解を提示

古代史・中世史研究者は座右に備えるのを
お勧めする。今後は「勘例」紙背文書の翻
刻にも期待したいところである。

最後に、紹介者が見て校訂の不備と思わ
れた箇所を列挙しておく（あまりに些細な点
は割愛）。①二四頁・二八日、同除目入
眼」の行：八には「七カ」と付すべきか。

②六八頁・勘申日の「四月十三日」に（曆
仁元年カ）と付すべきか（中原師季の官職や
「左大弁卿（藤原忠高ならん）」の任官時期など
から年次を絞り込める）。③七二頁・平清邦
の項の割注「重衡朝臣」：重衡には「清
盛」を付すべき。④一〇〇頁・前頁「源当
時」に付くべき傍書「左衛門督三人不審、
任本、」の位置が不適（ちようと頁跨ぎに
なったため）。⑤一〇四頁・藤原通後の割注

：「経実」の下に句点がない。⑥一四四
頁・藤原朝方の項「皇太后宮権大夫」：正
確を期すなら大に「太」を付すが（古代か
ら混用される単語ではある）。⑦一九四頁・
「不歴直講助教直任博士例」への籠頭「文
章博士」は「明経博士」の誤り。⑧二〇六
頁・「明経博士兼勘解由次官例」の割注：
「十市有象」は正確には市と有の間に「部

脱カ」を付す（ただし平安期の部姓はあえて
字を落として表記することも多かった。部姓を
嫌ったため）。
(鈴木蒼)

ディオドロス著

森谷公俊訳注

「アレクサンドロス大王の歴史」

河出書房新社 二〇三・四刊
四六変 四四八頁 六七〇〇円

本書は、ディオドロス著「アレクサンド
ロス大王の歴史」の全訳および注釈書であ
る。と、とりあえず書いてはみたものの、
実はディオドロスに「アレクサンドロス大
王の歴史」なる題名の著作はない。

著者のディオドロスは、紀元前一世紀の
人、シチリア島出身の歴史家である。シチ
リアは今でこそイタリア共和国最南端の州
であるが、古代にはむしろ、多くのギリシ
ア人入植者が居住する、ギリシア文化圏の
一部であった。ディオドロスもまた、ギリ
シア語で執筆活動をおこなっており、この
点ではギリシア人と呼ぶことができよう。

ディオドロスが活躍した時代は、ローマ
帝国の拡大期と重なる。古代におけるグ
ローバル化の波が押し寄せるなか、当時の
歴史家の関心は、古今東西の出来事を一書
にまとめあげる、「世界史（ユニバーサル・
ヒストリー）」の執筆へとむかった。ディオ
ドロス作の「歴史叢書（ビブリオテケ・
ヒストリケ）」も、通常そのような「世界
史」に分類される。原題の「ビブリオテ
ケ」は「図書館」を意味し、全四〇巻と
いう分量も、その名に恥じない。われわれ
はまるで書架から一冊を選び出すかのよう
に、ディオドロスの歴史「図書館」からお
目当ての巻を手にとってきたのである。

本書「アレクサンドロス大王の歴史」は、
このディオドロス著「歴史叢書」の第一七
巻に、訳者の森谷氏が便宜的につけた呼び
名である。この一七巻は、紀元前四世紀後
半に憐い世界帝国を築いた英雄、アレクサ
ンドロス三世の伝記ともなっている。先ほ
どディオドロスの歴史書は「世界史」であ
ると紹介した。「世界史」であるならば、
本来は場所も登場人物もめまぐるしく入れ
替わるはずである。ちやうど、高校世界史

の教科書がそうであるように。実際ディオドロスも、ほかの諸巻ではこの流儀にならっており、「一方その頃、別の場所では」といった具合の場面転換が多い。これにたいして、一人の人物に密着する第一七巻は、「歴史叢書」全体を見わたしても異色の作りとなっており、ここに森谷氏は、「世界史」の結節点を見出すのである。

本書の訳者である森谷公俊氏は、長年にわたってわが国のアレクサンドロス大王研究を牽引してきた。これまでアレクサンドロスにかんする多くの論文や著作を発表し

てきたが、なかには新書や文庫本など、広く読書界に資する業績も多い。しかし本書は値段設定からもわかるように、一般読者むけというよりは、ひたすらにアレクサンドロス研究とむきあつた成果と言えよう。とくに、本文にたいして三倍近くもの圧倒的な分量で付された注釈には、訳者の鬼気迫る思いすら感じられる。しからば本書は単なる訳書ではなく、訳者の研究成果の集大成として、アレクサンドロス研究はもとより、今後のディオドロス研究にとつても大きな礎となるであろう。(阿部拓児)

訂正

史学雑誌第百三十二編第四号

三一頁上段

平井上総〔書評〕牧原成征著「日本近世の秩序形成——村落・都市・身分——」の書誌情報に欠けておりました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

(正) (東京大学出版会 二〇二二・九

刊 A5 四〇二頁 七八〇〇

円)

史学雑誌第百三十二編第十号

表紙に次のような誤りがありました。訂正させていただきますとともに謹んでお詫び申し上げます。

(誤) 昭和戦時期における戦争指導体制

の構築と軍事補助体制の交錯

(正) 昭和戦時期における戦争指導体制

の構築と軍事補助体制の交錯